

伝統と新しい風 日永うちわ

日永の地で生まれ、300年の時を経ても変わらぬ形、製法で今も残る日永うちわ。
最後の製造業者となった株式会社稲藤では、
伝統を引き継ぎながら未来に繋げる取り組みを行っています。
季節と歴史を感じられる日永うちわの魅力を見。

四日市市指定無形文化財 技術保持者 稲垣和美さん

◆ 日永うちわ

日永うちわは、約300年前の江戸時代に、東海道を往来する人たちや伊勢参りの土産物として発展してきたとされています。

現在の四日市市日永、東海道の「日永の追分」の周辺で作られていたことから、この地域の名前がつけられました。

その特徴は、^{めだけ}女竹の丸竹を使い、骨と柄が一体となった丈夫なつくりで、心地よい柔らかな風を生みます。

日永うちわの製造業者は、明治時代には10数軒ありましたが、交通の便が発達するにつれ、東海道を旅する人が減少。さらに扇風機やクーラーなどの出現により、衰退の一途をたどり、現在は株式会社稲藤の1社だけとなってしまいました。

しかし、同社では、伝統的な日永うちわの製造技術を守り、この貴重な伝統技術を次世代に伝えています。

このことから、平成30年3月に「日永うちわの製作技術」が四日市市指定無形文化財に指定され、その技術保持者として、株式会社稲藤 常務取締役 稲垣和美さんが認定されました。

◆ 持ってうれしい、使って楽しい

稲藤がうちわの製造を始めたのは、明治14年の日永うちわ最盛期の頃です。当時は10数軒あったうちわ屋の中で最後に始めた店ですが、今では最後の1軒になってしまいました。

扇風機やエアコンなどの文明の利器が普及することで、うちわとしてのニーズはどんどん減っていったと思います。

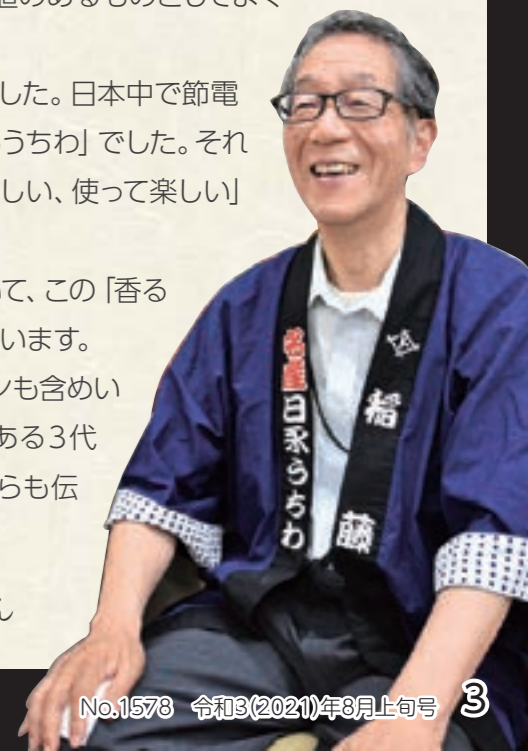
そこから、時代は進んで世の中がバブルと呼ばれる好景気の時には、価値のあるものとしてよく売れました。それが日永うちわ復活の第一歩でした。

その後、大きな転機となったのは、平成23年に発生した東日本大震災でした。日本中で節電の意識が高まる中で、注目されたのが竹の中に入った香り玉が特徴の「香るうちわ」でした。それをきっかけとして、ただの伝統工芸品としてのうちわではなく、「持ってうれしい、使って楽しい」という付加価値を評価してもらえたことがとてもうれしかったです。

以前から、伊勢型紙や松阪木綿などのコラボレーションに取り組んでいて、この「香るうちわ」も稲藤に根付いていたコラボレーションの精神が生きたなと感じています。

日永うちわをやめようと思うことは何度もありましたが、コラボレーションも含めいろいろな人に助けられてここまで続けてこられたと思います。私の父である3代目の「商売の続く限り、日永うちわの灯を絶やすな」の言葉を胸に、これからも伝統と革新を続けていきたいと思っています。

株式会社稲藤 取締役会長 稲垣嘉英さん



日永うちわが できるまで



竹選別

日永うちわは女竹を使用します。丸い竹をそのまま使うので、1本の竹からせいぜい2~3本しか作れません。



割竹

丸い竹を大きく8等分します。さらに細かく最高64本に割きます。天然の竹は太さが一定ではないため、骨の数も変わります。



窓作り

糸を弓の両端に結びつけ、弓を反らせ、窓を作ります。



貼り

骨全体に刷毛でのりを塗り、よれができたり中に空気が入ったりしないよう注意を払いながら丁寧に紙を貼り付けていきます。



乾燥

窓の部分にさおを通し、しっかりと乾燥させます。ここまで工程が進むと、うちわらしくなります。



断裁

しっかりと乾燥したら、はみ出した骨などを裁ち落とします。



へり付け・みみ付け

細長い帯状のへり紙を周囲に巻き、先ほど断裁した切り口を覆い、みみ紙を貼ります。ローラーで押さえて仕上げ完成です。



オンラインで伝える伝統文化

株式会社稲藤では、新型コロナウイルス感染症の影響で店舗でのうちわ作り体験に参加できない人や、遠方に住む人でも日永うちわに触れてもらえる機会を作るため、うちわ骨、和紙などがセットになったうちわキットの販売をしています。

《うちわキットを使ったワークショップ》



うちわキットを
カメラの前で
組み立てていきます



作業の合間に
日永うちわの
歴史も紹介します。

うちわ作りの動画を公開しています

HP https://www.jibasanmie.or.jp/2020sv_hinagauchiwa.html



毎年8月下旬に店舗で行っている日永うちわ勉強会を今年はオンラインで開催する予定です。勉強会のみ参加は無料、オンラインワークショップ参加の場合は有料です。

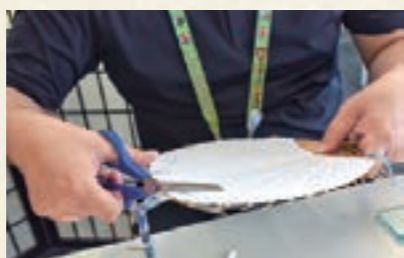
開催日など詳細は、株式会社稲藤 ☎345-1710 HP <https://www.inatoh.co.jp> へお問い合わせください。



日永うちわ作りを 編集者が体験



しっかりのりを塗って貼り付け



体験の場合、はさみで断裁



端から竹が出ないようにへり紙を付ける

編集者コメント

初めて日永うちわ作りを体験しました。作業を進めるにつれて、自分だけのうちわの形になっていくので、充実感がありました。細かい作業もありますが、少し大人が手伝え、子どもでも楽しく体験できると思います。子どもの夏休みに一緒にやってみたいですね。



四日市の誇りを日本全国へ



株式会社稲藤
代表取締役社長
稲垣雄介さん

日永うちわは、うちわとしての価値とは別に、歴史があるということの魅力の一つだと思います。300年前から姿を変えずにここにあり、江戸時代の人々が愛用していたものを、現代の私たちが今も愛用している、そんなストーリーを自ら作っていただける楽しみがありますね。先祖代々築いてきた日永うちわの歴史を私も受け継いでいかなければなりません、ただ単純に続けることが目的ではなく、新しい取り組みも進めていきたいです。

これからは、伝統工芸自体も「持続可能な消費と生産」というSDGsの考え方から、無理なく続けられる状態をいかにして作り出すかがキーワードになってきます。エコなものが求められる昨今、うちわは時代に沿っているため、さまざまな新しい価値も付加していきながら、時代と共に進めていきたいと思っています。また、新しいものを開発し、世に広め、お客様に受け入れていただくために、現代はネット販売など全国への販路が開けています。そういったところも持続可能な第一歩かなと思っています。

夏のイベントが中止になって、皆さんがうちわを使う場面が減っているのは、製造業者としてとても寂しい気持ちですが、四日市の誇りとして日本全国で日永うちわを使っていただけるようになってほしいですね。